

文窓

ふみのまど

神戸大学文学部 同窓会 文窓会
 事務局：〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
 ☎ & FAX (078) 806-7207
 (月、水曜日の午後3時以降)
<http://www.kobe-u.biz/bunsokai>
 文学部：☎ (078) 803-5595 FAX 078-803-5589
<http://www.lit.kobe-u.ac.jp>

14号
2016.9.30



特集／私の生き方：文系不要論にももの申す
 プチ同窓会、写真とコメント大歓迎！！

第10回文窓賞 2016年 学生レポートコンクール結果速報！
 文学部ホームカミングデイ 2016 [10月29日(土)]



振り返れば六甲の山並み～あの頃の友に会いたい

第11回 神戸大学&文学部ホームカミングデイ2016

— Kobe University Homecoming Day 2016 —

10/29(土)

神戸大学ホームカミングデイ2016

出光佐三記念六甲台講堂(登録有形文化財)
 12:00頃～ティーパーティー(記念式典終了後)

※詳しくは 下記のホームページをご覧ください。

第11回 神戸大学 ホームカミングデイ 検索



文学部でのホームカミングデイは、午後から!! 誘い合わせて、お気軽にお越しください!

文学部ホームカミングデイ2016

- 13:00～13:30 受付 文学部 B棟132教室
- 13:30～13:40 文学部長挨拶
- 13:40～14:50 講演
「シェイクスピアと漱石—『ハムレット』を中心に」
芦津 かおり 准教授(英米文学)
- 14:50～15:20 学生によるスピーチ
- 15:30～16:00 第10回文窓賞(学生レポートコンクール)
授賞式 及び受賞者スピーチ
- 16:00～16:20 文窓会総会
- 16:30～18:00 懇親会 瀧川記念学術交流会館
(参加費: 3,000円/当日)

<併設企画> 12:50～16:30
 (文学部 B棟132教室前)
 神戸オックスフォード日本学プログラム
 (KOJSP)の活動記録、教育研究プロジェクトの活動記録等

■お問い合わせ先 人文学研究科総務係
 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
 Tel: 078-803-5591

文窓会(文学部同窓会)ホームページ
<http://www.kobe-u.biz/bunsokai/>

「シェイクスピアと漱石—『ハムレット』を中心に」

講演者: 芦津 かおり(英米文学 准教授)プロフィール
 京都大学大学院文学研究科博士後期課程(英語学英米文学専攻)単位取得退学。日本学術振興会特別研究員、Oxford University, Research Associate、大谷大学専任講師・准教授を経て、2010年より神戸大学准教授。専門分野はイギリス文学・演劇、研究対象の中心はシェイクスピア。近年は日本におけるシェイクスピア受容を中心に研究している。
 (神戸大学大学院人文学研究科・文学部HP・教員紹介より)

*第10回文窓賞(学生レポートコンテスト)入賞者の作品は、ホームページ「文窓」でお読みいただけます。

(今年はぜひ、あなたも輪の中に!) 第10回文学部ホームカミングデイ2015(10月31日)の様子
 今年もぜひ誘い合わせてご参加ください!!





未来への投資

人文学研究科長・文学部長
文窓会名誉会長 増本浩子

教育が未来への投資であるという話は去年も書きましたが、それをもう一度繰り返します。というのも、いま人文学研究科・文学部で飛び交っているのはお金の話だからです。もともとお金にはあまり興味のない人たちが集まっている部局なのに（興味があれば、普通は文学部の教員という職業を選ばない）、なぜそんなことになっているかという、予算がどんどん削られて今までどりの教育研究活動ができなくなりつつあるからです。このままでは私たちが看板してきた少人数教育も危ぶまれるほどです。大学本部からはことあるごとに、外部資金を取ってこいと言われていました。

人文学研究科・文学部の予算が減っているのは、大学全体の予算規模が縮小しているからで（そもそも国が教育への支援を削減しているのです）、その点で事情はどの部局も同じなのですけれども、実際の台所事情は文系と理系とで大きな差があります。理系は獲得する外部資金の額が桁違いだからです。人文学がもともとお金の

かからない学問だということもありますが、その背後にはやはりあの「役に立つ／立たない」という考え方が潜んでいるように思われます。今すぐ役に立たない学問には投資の必要はないし、そういう学問を担う若手を育成する必要もない、というわけです。腹立たしいことにいま学内では、たくさんお金をとってくるこそすぐれた研究者の証である、という考え方が蔓延しつつあります。が、実際には金額の多寡は研究者の能力ではなく、研究内容が今の市場のニーズに応えるものかどうかで決まっているのです。

私はドイツ文学が専門なのですが、ドイツの大学でもやはり理系重視の傾向や予算削減に関する嘆き節が聞かれます。しかし、根本的に異なるのは、日本政府が大学教育を費用対効果でしか見ていないのに対して、ドイツ政府（正確には州政府）は大学教育を金儲けから切り離して考えている点です。何が社会にとって真に「役に立つ」かは、何十年も先にならないとわからない。けれども、ドイツの未来を支えるのがいま教育を受けている若者たちであることだけは確実です。だから、その若者たちに国の（あるいは世界の）未来を賭けて一方的に投資するのは。日本の国立大学にあたるドイツの州立大学では、留学生も含めて学費が基本的に無料で、それを税金の無駄遣いだと思う人はいません。

日本の国立大学はゆっくりと斜陽です。

ということを理解して、初めて他人と接していけるし、相手を大切に考えることができる。そのような学問分野が軽視されてはならない。

同窓会文窓では毎年「文窓賞」という学生レポートコンクールを行っています。文学部の学生に、文章で自分を表現する機会を与え、賞金を出して後輩を応援しようというものです。去年は3編の応募しかありませんでした。今年は15編という多数の応募がありました。それは教員の方々に文窓賞の意義を説き協力していただき、学生に伝えてもらったことが大きかったと思います。応募レポートを読んでも、学生が大学で学ぶことにより高校とは違う専門分野の講義から、自分の人生について学んでいる姿が見て取れます。例えば次のごとくです。

「勉強というものがどのようなものなのかをひしひしと感じられる日々を過ごしている。」

「大学では貪欲に専門知識を得ようと思えば、先生方から惜しげもなくその手法や情報を示し指導してもらえる」「大学の講義で歴史学を学ぶ理由が分かった」「日本語学の授業が自分の偏狭を和らげた」

学生は教員から多くのことを吸収しており、教員は学生に学問のなんたるかを教えている。

文学部の主体は教員と学生です。同窓会がすべきことはこの2者を応援すること。即ちより良い多彩な学問分野の教員を確保し、後輩には自由に学問できる充実した研究環境を与え、優秀なる入学者を確保する。そうしなければ文学部に押し寄せる荒波を押し返すことはできないでしょう。

今回の文窓賞応募数の増加に見るように、今後も同窓会—教員—学生という協力関係を抜きにしては同窓会の発展はないと考えます。



同窓会と教員と学生

文窓会会長 16回生
武藤 美也子

今年がオリンピックの年。ブラジル開催で熱戦が続くテレビの前で熱烈応援。日本の裏側の国での開催で毎晩寝不足。参議院選では自公過半数獲得。日本の大都市東京都知事選では自民党公認を拒否した小池氏の圧倒的勝利。世界で頻発するテロ。毎年増幅していくかのような猛暑。暑い暑い夏が続いています。会員の方々お元気でしょうか。神戸大学文学部も暑い暑い日常の中にいます。

昨年から続いている文系軽視の傾向は一向に変わっておりません。現に29年度からは発達科学部と国際文化学部が統合され「国際人間科学部（仮称）」となります。そこで調整された定員は新しくできる「科学技術イノベーション研究科」に割り当てられます。科学技術の発達は人間にとって多くの恩恵を与えてくれることは確かです。AIが白血病の患者を救ったという明るいニュースもつい最近報じられました。素晴らしいことです。科学技術の発展はとどまるところを知りません。ただその科学技術の成果をどのように使用するかは人間が判断するのです。

文学部卒業の私は次のように思うのです。自然科学は現実です。この世にあるものを研究対象とし、それらのものを発見し、いかに人間に役立てられるかを追求する。文系の研究対象とするものは人間の心の営みである。自分の心も分からないのに他人の心がわかるはずありません。心は千差万別です。それぞれに考え方が違う

神戸大学文学部生の人間力・文学力・未来を応援する

第10回 文窓賞 2016年

学生レポートコンクール 結果発表

神戸大学文学部に入学し、学生生活においてチャレンジしようとしていること、またなしたること、そのような目標や現状・体験をレポートしてもらおう（文窓賞）学生レポートコンクールに、今年は教員の方々のお声がけもあり、15作品の応募がありました。選考会は9月9日に実施、今年から新たに「優秀賞」「佳作」に下記の作品が選ばれました。

優秀賞（表彰状と賞金5万円）

「『誰もいない』どこか」

植木 ゆりいか（英米文学専修5回生）

小さい時から人目を気にし、そのくせプライドは高く暮らしてきた私が神戸から留学し、（本人の嫌う表現）異文化の中でアイデンティティーを自覚し、私で有り続けよう決意。テーマとしては観念的になり易いところ程良く平易に述べている。

「おいしいケーキの作り方」

衣笠 美希（仏文専修4回生）

好みのケーキのレシピ・手順を細かく書き、作業していく中で、ふと気がつく今この環境下での気落ちする出来事を想起している自分がある。趣味か現実逃避か、いずれにしても就職活動の苦勞の一断面が表わされていて、評価者から「かわいければいいけれど切ないね」という声が聞かれた。純粋にケーキ作りの楽しさを実感できる日の近い事を祈ります。

佳作（賞状と賞金1万円）

「『思いあがった謙謙心』による学び」 田中 昇一（日本史3回生）

社会の人文学軽視の風潮等、逆風ともいえる昨今の状況下、歴史学の出番が多くなるような事象が出てきているので、テーマに掲げたスタンスで今後頑張っていこうという決意表明。

「大人になるという事」 中澤 篤史（学部1回生）

教師を目指しているということで、理想とする大人像は領けるものが有るように感じられるが、教師として生徒に贈与するものは何が有るだろうか、と考えて欲しいと思います。

「茶碗の中の池」 山根 彩花（学部1回生）

形だけ追っかけていた高校の茶道から、続けて大学でも行うことで、物事の本質に少しでも近づくことが出来るようになったかなと実感しているという話。全ては自ら動かなくては始まらない。

「『純粋な関係』をめぐる通念と私見」 三宅 萌（学部1回生）

出た！という感じのレポートである。学生らしく言葉の定義にこだわって、抽象的で観念的で出口が何処にあるのか心配したけれど、調和で締めくくって何とかレポートになった。評価した人もいたことを申し添えます。

*多数のご応募をありがとうございました。受賞を逃した方には「参加賞」として3千円相当のギフト券を差し上げます。来年も多数のご応募をお待ちしています！

選考を終えて

応募締切日に事務局から15通の応募がありましたと聞いた時、すぐに浮かんだのは、15とは多すぎる！先生方の呼びかけが効いたのか、クォーター制になったので締切のタイミングが良かったのか、といろんな思いが同時に頭をよぎりました。ざっと応募作品数の中身を見ると、男子8・女子7、マス

タークラスから2・学部生が13、という結果でした。今回は、優秀賞2作品・佳作4作品と多くの応募者に入賞の栄誉を獲得して頂きました。

（文責 審査委員長 吉田 浩次）

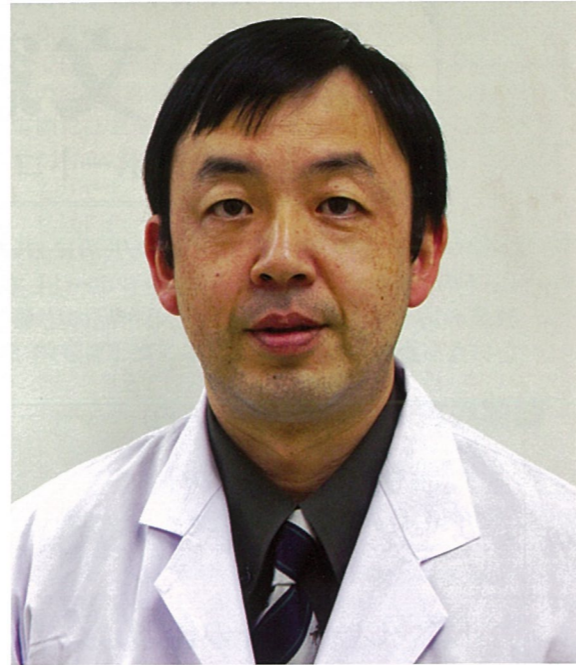
選考委員

増本 浩子 学部長 白鳥 義彦 副学部長 市澤 哲嗣 学部長 武藤 美也子 日高 健一 花木 直彦 廣野 幸夫 西川 京子 吉田 浩次 田中 賢司 三宅 征彦 河島 真

昨夏以来、文系不要論の是非がさまざまな場に取り上げられてきました。個々にご意見や思いがあることでしょう。本誌では同窓の方々の生き方を通して、問題提起をしてみたいと、このテーマを掲げてみました。

ある国文科卒医師の雑感

吉谷 健司 (32 回生) 国文学専攻



私は、大阪のとある病院で麻酔科医をしている。ここに文章を書いているのだからもちろん神戸大学文学部を卒業している。あることが契機になり卒業後に医師を志すことになった。その結果、理系と文系の大学を出ることになり、両方の視点を持つ機会に恵まれた。それ故というのもおこがましいが、理系の世界に巣食う問題点が見えるように思えることがある。少しそのことについて触れてみたい。

文学部で培った論理的思考の土台

神戸大学文学部を卒業したのは1985（昭和60）年で、修士課程に入学し1987（昭和62）年に修了した。在学中は国文科に籍をおいて、いろいろな分野にくびを突っ込んだが、最終的に中世説話文学に落ち着いた。今はもう退官されて一線を退かれたが、池上洵一教授に師事していた。

国文学というと、大学入学当初は文学作品を批評するといった漠然としたイメージしかなかった。しかし、永積安明先生の「中世文学の世界」に出会い、いかに論理的に分析を構築し、データを積み重ねて人を納得させるかという、論理的思考の上に成り立った批評を行わないと意味が無いことを知った。当時の池上洵一教授の「今昔物語」の特殊講義を受けて驚愕したのは、「今昔物語」のなかで民衆の間に語り伝えられているある話が、当時の仏教が神道勢力を駆逐していくさまを描いており、平安から鎌倉へと時代が大きく流れていく時代背景を色濃く反映しているということを知った時だった。

私は文学の世界を離れて幾久しいが、当時、文学部で培った思考回路と古典文学が捉えているその時代の思想を理解する試みは、それ以後の私の土台となっているのは疑うべくもない。

医師を志した契機

私はその後、大きく進路変更し医師の道を志すことになる。といってもそれを決断したのは文学部修士課程2年になった頃だった。身内に病を患ったものがいて、それが予想以上に重症であった。物を調べることに慣れていたので、図書館に行き片っ端から医学書を読み漁った。そのうち、その疾患に関しては専門用語も覚えて担当医とある程度の会話も成立するようになっていた。私は、学生であると担当医に伝えていたのだが、どうも医学生と勘違いされたいらしい。

それはさておき、医学書を読むうち、ひよつとしたらこれは自分の性にあっているのではないかと思いはじめた。というのも、文学部修士課程での勉学に自分で限界を感じていた時でもあり、逃げ道を求めていたのかもしれない。文学部というところは抽象的、形而上学的な思考がある程度できないと生き残っていけない世界であり、その思考が私はどちらかというと苦手だった。当時の大学院生で「あいつにかなわないなあ」という人物は五指にあまった。

一方、医学書は知識を積み重ねていくと、ある程度の理解に到達する具現の世界であった。抽象的な思考は苦手だが、力仕事得意な私には向いているような気がした。また、文学部の勉学はかな

りのエネルギーと時間を消費するのであるが、これが果たして世の中に貢献しているのかという疑問も感じていた。この疑問の答えは、医師になってから見つけることになるのだが…。

昼間は修士論文、夜は受験勉強

理系の学問は、世の中の直接的な貢献度は高い。工学部などは最たるものだろう。ビルを建てるのに土木の知識なしには不可能である。物理学の力学はその土台となる。数学になると、数学科は少し文系寄りの哲学的な要素も含んでいるが、微分方程式などは医学の分野にも貢献している。医学は人を助けるのであるから、世の中への貢献度は抜群であるように思えた。そのような憧れもあり、一念発起して医学部受験を志すことにした。

しかし、修士課程も途中で放り出す訳にはいかない。修士課程1年目であらかたの準備はできていたので、それから必死で修士論文の作成に取り掛かり、夏頃にはめどが立ってきた。「古今著聞集」という中世の説話集を題材にした。さて、それからは、昼間は文学部の図書館で修士論文を作成し、夕方になると夜8時まで開いている六甲台の図書館に行き、そこで大学の受験勉強をすることになる。文学部図書館ですすがに、大学受験の問題集を広げることには抵抗があった。六甲台の図書館は司法試験の勉強をしている人が多く、他の人に構うような感じはない。むしろ、小声でも話をしようものなら、即座に注意される。その厳しさが、私は好きだった。

もともと、数学は得意だったので、微分積分を新たに勉強することでなんとかなった。理科も、共通一次世代（センター試験の前身）で2科目やっていたので、医学部は化学、生物で受験できることが幸いした。英語は大学院受験をする際に勉強したので苦労は少なかった。修士論文も書き上げ、一発勝負で修士課程修了の年にセンター試験も受験した。さすがに、思ったより点数は伸びず、甘くはないと思いつつ、2次試験も受けた。感触はそれほど悪くなかったが、結果は不合格。出身高校に受験成績が知られるので、聞いてみると7点足りなかった。もう1年だけ頑張ってみようと思いついた。当時の担当教官であった池上洵一教授にも相談し

了解してもらって、修士課程を修了し、そこで神戸大学を去ることになる。1年頑張ろうと、予備校に行くことにした。1年後、それなりに頑張った甲斐あって、国語、英語、理科、社会はわりと点数を稼ぐことができ、奈良県立医科大学に合格することができた。

医師になり22年目に感じる疑問

さて、医学部に入ると、単科大学ということもあり高校の延長のような雰囲気である。一般教養は神戸大学で受けたものときほど変わりはない。

3年生からいわゆる基礎医学と呼ばれる、医学の基本となる学問を勉強するが、このあたりから専門学校のように医学のみの勉強になる。覚えることがとにかく多い。5年生からは臨床科目の内科学、外科学など、患者さんを相手にした学問が始まる。医学生はみんな覚えることに殆どのエネルギーを費やす。卒業年度の最後に医師国家試験を受け、合格すれば医師となることができる。一通り、全科目を勉強し、卒業後にどの科に進むかを決定する。今は、卒後2年は初期研修として全科を回って、それから進みたい科を決めることになる。私は麻酔科に進むことに決めた。私のように大学を卒業してから医学部を受験しなおした人は1学年に数人はいたが、文系からきたのは私だけだった。

今、改めて大学で受けた医学教育を振り返ってみると、論理的な思考を求めるようなカリキュラムは存在しなかった。

今年で医師となって22年目になる。今は、若い医師を教育する立場にもあるし、奈良県立医科大学で講義も行っている。しかし、医師になった頃からうっすらとした疑問を感じており、それは年を追うに連れ膨らんでいくことになった。日本のシステム上、医学部の偏差値は高い。とにかく、頭が良かったから医師になったという感じの人が多い。優秀でテストの点数を取るのはいまいが、しかし、自分で一つ一つを積み重ねて結論に到達するような訓練は受けておらず、これらが、日本医療全体に影響を落としているのではないかと今は考えている。

日本の医学部教育に抜けているもの！?

それが端的に表れているのが、日本の医師はと

にかく論文を書くのが下手であること。書く訓練を受けていない。医学部在学中にレポート提出は一切無し。筆記試験のみ。

しかし、医学を進歩させるのは臨床研究、基礎研究であり、臨床医学の新しい知見を発表し論文にするのは必須の事項である。ところが、若い先生たちは全くといっていいほど文章が書けないし、論理的な思考に慣れていない。また、学生の頃と異なり、自分で研究テーマを見つけていく必要がある。それには様々な論理的思考、方法論の検討が必要であるが、そのトレーニングも受けていない。さらに言えば、患者というヒトを相手にする職業であるにもかかわらず、患者の気持ち、家族の心情などを理解できない人も多い。要するに医学部教育で抜けている部分が多すぎる。

アメリカでは医学部は日本のシステムでいうと大学院扱いで、一般の4年制の大学を卒業した後に進学することになる。つまり、私のように文学部を卒業したような人も普通にいることになる。少なくとも、基本的な論理的思考能力は身につけてから医学部に進学しなさい、というシステムであるように思える。私が神戸大学で国語学を教わった東京大学文学部名誉教授の尾上圭介先生は、「20代の後半で勉強しない奴は物にならない」とよくおっしゃっておられたが、医師としての私の基本的な思考能力は文学部時代に培われたものであることは疑う余地が無い。

文系不要論まで飛び出す末期的状況に日本は置かれている。今から振り返っても、医学にとっても、哲学は特に必須科目で、歴史学も必須であろうか。文系の基盤がしっかりしていないと自然科学の発展もままならないのではないかと思う。文系、理系の双方を経験して感じたことである。

「係り結び」が示唆するもの

今、経済、工業、医学など様々な分野において日本は凋落傾向にある。しかも、凋落傾向にあることに気がついていない人も多い。この現象を文系的観点から分析してみよう。

高校の古典で習った「係り結び」という、文の末尾を終止形で終わらずに連体形や已然形で終わる文型がある。この「係り結び」は江戸時代には

消滅してしまう。それはなぜなのか。

先人の分析によると、文を連体形で終わる「係り結び」は、そこで読み手に文を終わらないまま投げ出すことを意味している。後にまだ続きそうな余韻を味わうことが狙いとされ、読者層が宮廷サロンという限られた集団であったことから成り立っていた。

しかし、やがて文学は宮廷から庶民の世界に広がっていった。これは、国語学者の渡辺実氏の言う、文体が「開いた構造」から「閉じた構造」へと変遷したことに一致する。要は、「係り結び」のようにさまざまに読み取れる文よりも、シンプルに閉じた構造の文が求められていった。平安末期から鎌倉、江戸時代へと時代が代わるなか、文体も単純明快に変化し、より多くの庶民にも理解しやすく変わって、「係り結び」は消滅した。

この「係り結び」の消滅と単純明快化への変遷を理解していれば、今の世相も見えやすくなる。たとえば、日本の工業製品を見ると、10年ほど前までは他の追随を許さないほど、製品の品質が秀でており、それだけでアドバンテージがあった。しかし、情報が氾濫し、貪欲に次々と変化を吸収していく外国企業に後れを取るようになった。

日本という限られた集団の中に留まり続けているのは、かつての「係り結び」の消滅と同じ轍を踏むのではないか。文系的な思考をできる人たちがそが、混迷を続ける日本の出口を見出す手がかりを持っているのかもしれない。

執筆者プロフィール

1980(昭和55)年 神戸大学文学入学、1985(昭和60)年 同国文科卒業(大学院入試に落ち1年意図的に留年)、同年 神戸大学文学部国文科修士課程入学、1987(昭和62)年 同課程修了。1988(昭和63)年 奈良県立医科大学入学、1994(平成6)年 同卒業。同年4月より麻酔科医。2002年より国立循環器病研究センター 麻酔科、現・手術室医長。奈良県立医科大学麻酔科学教室 臨床教授、大阪大学医学部麻酔集中治療医学教室 臨床教授、東京医科大学麻酔科学分野 兼任准教授。趣味は自転車。

「文学部不要論」の行きつく先は

島津(旧姓 森)陽子(16回生) 国文学専攻

文科省が愚かな通知を出したことに、まったく馬鹿げていると腹が立った。国立大学が独立行政法人となって、社会に開かれた面も出てきたが、昔は考えられなかった産学協同がどんどん進んでいるようで、そのうち軍学協同が当たり前になりそうな心配が怖い。日本では実用的な医学や理工系の学部が重視され、予算割り当てでも文系はずっと差別され続けてきた。明治以来、はやく欧米の技術に追いつけという政策があったせいだろう。

男子が文学部に進みたいと言えば親が反対したという話は、私が学生の頃は嘘ではなかった。

しかし本当に文系の学問は軽んじられてよいのだろうか? 因みに古代ギリシャでは哲学が学問一般を意味したし、現代においても世界観や人生観の根本となる学問は尊重されなくてはならない。文学についていえば、人間を識るためには必須の学問ではないだろうか。ドイツ人から話を聞くと、歴史ある大学ではさすがに文学部が充実していて、日本は足元にも及ばない気がする。

今日の日本の学生たちは私よりよほど賢く現実的で、卒業後のこともしっかり考えているようだ。私は誠に愚かだったかもしれない。父が神戸空襲で死んで、貧しい母子家庭に育ったのだが、自立した人間になるためにとにかく大学へ行きたかった。しかし卒後の計画は曖昧だった。教師は嫌いだったので教育学部は選択肢になく、国語や英語が得意でもあったせいで、迷わず文学部を志願。入学後も金儲けには無縁の学部だとわかっていたので、4年生になっても就職活動もせず呑気だった。

リクルートスーツを着てはやばやと就活に専念する現代の学生たちを見て、心底可哀想に思う。大学がビジネス・スクール化してはならないと考えるからだ。大学は本来、世に出てすぐ役立つようなノウハウを教える所ではない。ものの考え方や学び方(方法)を勉強する所だと恩師から叩き込まれた。先生方から戴いた学恩はいうまでもないが、大学時代の友人たちは自己形成にかけがえのない存在となった。

文学部の学生たちは一風変わったユニークな

人が多いので面白く、卒業後の生き方も多様である。国会議員にも、落語家にも、企業人にもなれる、そのくらい幅広い潜在能力をもっているということだ。

拙速な結果のみ求める日本型の教育では、魅力的な大器は育つまい。市民社会の真の豊かさと、個人の幸福を求める寛容な成熟した日本に住んでみたいと願う。金銭論理に支配されない教養ある文学部出身者が増えれば、世の中を変えることができそうな気がする。

文学を学んだ人はものごとを複眼的に見ることができるので、簡単に騙されない。だから悪政に対しても敏感である。「ことばのあや」も多少は知っているから、難しい事柄を優しく人々に伝えることができる。人の心を読む想像力も鍛えているので、弱者の味方「善きサマリア人」になることもできる。そういう人たちは社会に必要で大切な存在だ。

ゆえに私の結論：文学部を潰すような事態になれば、必然的に現代日本の病は悪化するに相違ない。

執筆者プロフィール

1945(昭和20)年生まれ、1968(昭和43)年卒業。出版社、予備校などを経て高校国語教師となる。夫の転勤・転居で失業し、以来非常勤講師を60歳まで。傍らボランティアで留学生に日本語を教える。医療福祉生協の活動は現在も続けている。三重県津市在住。



大勢の教え子たち、同窓・後輩、

昨年の特集「私の戦後とプレ六甲台時代」に「文学部・御影学舎の思い出」を寄稿いただいた2回生、上田 雄さん（史学科国史学専攻）が、2016年6月6日逝去されました。それを知ったたくさんの教え子や同僚、友人の皆さんが呼びかけ、上田さんが若い頃から好きだった山にちなんで、8月11日初制定の休日「山の日」に「お別れの会」が開かれました。



上田さんは旧制芦屋中学校から新制高校への転換期に在籍。その発案で誕生したという芦屋高校校歌を歌う、同校コーラス部OBの皆さん。上田先生の口癖は「ええかげんでええよ、きちきちしたらあかんよ」とのこと。思い出が語られるたびに笑いが起こります。

会場はJR芦屋駅にあるホテル竹園芦屋の宴会場。開始時間の正午には、会場の収容人数いっぱいの157名の方が参加。遠くは北海道や関東、九州から、まだ多数の参加希望があったのを会場の関係でやむなく断ったという、会の事務局の方の話でした。

上田 雄さんは、1950（昭和25年）に県立芦屋高校を卒業、神戸大学文学部文科（現・文学部）に入学。新聞部とラグビー部に入学、部活以外にも北アルプ

ス登山やスキーを楽しみ、卒業後は教職に就かれました。芦屋市立山手中学校を皮切りに、西宮市立西宮東高校、1965（昭和40）年には母校・県立芦屋高校へ転職。長く教鞭をとった後、芦屋高校から配転で尼崎稲園高校へ、1992（平成4）年に稲園高校を生涯一教師として定年退職されました。

教職の傍ら30歳の時に、法政大学文学部地理学科（通信教育課程）に入学し、古代史、歴史気候学を専



1931（昭和6）年兵庫県武庫郡生まれ。神戸大学を卒業後、兵庫県下の中学校・高等学校の社会科教諭を務める。その傍ら、法政大学（通教課程）文学部（地理学）卒業。定年退職後、阪急電鉄の池田文庫学芸員として勤務。生涯、研究・執筆・講演活動を続ける。日本海事史学会会員、日本暦学会理事。著書『遣唐使全航海』（草思社 住田正一海事史奨励賞受賞）ほか多数。

友人たちの笑いと拍手に包まれて

「上田 雄氏(2回生)お別れの会」 report

攻。43歳で日本武道館で卒業式を迎えています。その後も、研究テーマであった中国大陸と日本文化の交流としての遣渤海使・渤海史研究に打ち込まれ、孫 栄健氏との共著『日本渤海交渉史』（1990年・六興出版）を59歳の時に上梓。さまざまな健康トラブルにめげず、その後もエネルギーが豊富かつ飄々と研究や出版、講演活動を継続。謎が多かった隣国渤海の歴史と奈良・平安期の交流について明らかにされました。



わせるために太陽の軌道上の位置を示した太陽暦そのもの、といった現代人として必読の内容がユーモアたっぷりに記されています。

和やかで笑いが絶えないお別れ会でしたが、思えば、昨年、8回生の萩 紀男さん（国文学専攻）に紹介いただき、上田さんに原稿依頼をしたのが、8月13日でした。わずか実質半年ほどの電話とメールでのおつきあいでしたが、短いやりとりの中に独特の洒落っ気と小気味よいユーモアが感じられ、筆者も今なお鮮やかな印象を抱く者の一人です。

会の最後に奥様、お嬢様の挨拶があり、その中で最期の言葉が紹介されました。

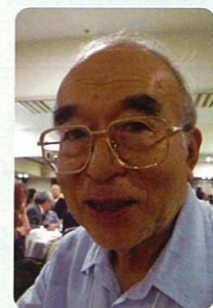
「人は死ぬ前に過去のことが走馬燈のように浮かぶというけれど、僕はみんなの未来を見たい」

心からご冥福をお祈りいたします。（文責：田中む）



後輩をいつも同窓会に呼んでご馳走してくれる先輩でした。

徳田 泰治さん（8回生） 国史学専攻



参加者のお一人、国史の後輩にあたる徳田さんから、こんなエピソードを伺いました。

「当時の文学部はまだ御影にあり、学生数も少なかったのですが、教授陣は充実していました。戦後の復興に時間がかかった東京から招聘した先生方も多く、活気のある恵まれた環境でした。上田さんは卒業後も国史の同窓会に先生方や我々学生も呼んでくれて、

当時はすごいご馳走だったすき焼きを食べさせてくれたんです。そんなメンバーの中に、2010年に文化勲章を受章した脇田（麻野）晴子さんもいました。4回生で、当時、東大の大学院を受験し、何でも他大学から院を受験した女性第1号とかで、「よう受けに来たな、ワッハッハ」と面接の教官がその度胸のよさを大笑い。笑って、落とされた、と悔しそうに語り、迷うことなく京都大学に進みましたよ」

当日は上田さんと同期で、テレビのお笑い番組の元祖プロデューサー・澤田隆治さんも参加のご予定でしたが、残念ながら欠席されました。

文窓会主催・新入生歓迎ティーパーティーの様子です。



新しい後輩たちが入学してきました！（記事は10ページ）



3月25日

文窓会主催「平成27年度 卒業生歓送パーティー」



文窓会主催の「神戸大学文学部・大学院卒業・修了祝賀会」が3月25日午後2時半から「LANS BOX」2階で開催されました。午前中、神戸ポートアイランドホール（ワールド記念ホール）での「学位記授与式」を終えた卒業生たちは、晴れやかな笑顔で参加。この日の卒業生の出足はあまり芳しくなかったが、予定時刻を過ぎると、みるみるうちに狭いホールは満杯に。

はじめに武藤文窓会会長が「これからは同窓会を通じてのつながりになります。きずなをしっかりと結んでいって欲しい」とあいさつ。

続いて立った増本文学部長からは少し“辛口”の贈る言葉も飛び出しました。「皆さんの巣立って行く世界はどんな世界でしょうか。自分たちでできることを一生懸命やる。そうでないと世界は変わっていかない」。会場は一瞬ビーンと張りつめていい雰囲気になりました。

こうして卒業祝賀パーティーは交流タイムに移り、各先生方からは「いい出会いをもってまわりの人を大事にしてください」と、激励と期待の言葉が贈られ、和やかな輪は次第に広がっていきました。

本日の参加者は約130人。秋のホームカミングデイには、ぜひ一段とたくましくなった姿を見せて、同窓会を大いに盛り上げてください。(文責：三宅)

→写真p12

5月18日

文窓会主催「新入生歓迎ティーパーティー」



今年も恒例の、文窓会主催による「新入生歓迎ティーパーティー」が開催されました。武藤文窓会会長と増本人文学研究科長のあいさつのあと、会場に用意された軽食をつまみながらの立食パーティー。新入学生同士で歓談し、懇親を深めました。その後、専修ごとに分かれ先生方を囲んで専門分野の話を伺います。熱心に耳を傾けたり、意見を述べたりする新入生たち。ここでの話し合いが、各自に適した専修を選ぶ際の一助となることを

願います。

ところで残念ながら今年は、出席者数が少し減少したようです。今年から神戸大学ではクォーター制（4学期制）が採用されたため、パーティー開催の時間（水曜日の午後）にも、全学共通科目の授業が行われるようになりました。そのため、参加できなかった新入生が出てしまいました。グローバル化の進展を始めとする様々な変化の中、大学という場にいる学生（そして先生方）にも柔軟な変化への対応が求められているのは間違いないようです。(文責：坂本)

→写真p8-9

7月27日

神戸オックスフォード日本学プログラム第4期生修了式



オックスフォード大学東洋学部日本語専攻の2年生全員が、1年間を神戸大学文学部で学習する「神戸オックスフォード日本学プログラム（略称 KOJSP）」第4期生は、昨年10月に来日して以来、2学期にわたる学びを終え、7月27日に修了発表会と修了式、修了パーティーが行われました。

文窓会からも、田中（賢）、西川が参加。修了発表会では、オックスフォード生のテーマの選択、考え方・見方の相違などがフレッシュな刺激を与えてくれると感じました。中でも、面白いと思った発表は、「日本人と鶏の関係」～古代、長く鳴くトリとして神聖化されていたニワトリに始まって、いろんな観点から鶏についての発表があり、日本語の使い方も論点も明確で、興味深く聞きました。（懇親会で講演者と話す、家に鶏を飼っていて、子供の頃から、鶏をこよなく愛しているとのこと！）。また、「自殺について」～先ず、日本は自殺率が非常に高いとのこと。日英の比較もあり、日英共通の理由：不景気とか一種の流行り（自殺の）等。異なっている点：日本は女性の自殺率が高い（給料や昇進等差別のせいかな？）田舎の方が高い（英国は都会が高い）。これまで余り考えたことがなかったが、いろいろ考えさせられる内容でした。(談：西川)

→写真p12

卒業生アンケート「あなたにとっての文学部とは？」

文学部に学んだ日々を振り返って…卒業式の当日、文窓会から投げかけた問いに、多数の方が丁寧に答えてくれました。その中から一部をご紹介します。

深い思考能力と論理を組み立てる能力を得ました。そして、歴史の中での自分の立ち位置を見つめ直すことができました。(森 智仁/国文学 卒論：坂口安吾「白痴」)

正しい言葉の在り方について、時代変遷に寄り添いながら、常に研究し、記録に残していくことは、人類史として意義あることだと思います。(船越 美幸/国文学 卒論：敬語使用について)

世の中は、技術や理工系など実際に人間の生活に役立つものだけでは不十分です。簡単に言うと、自分が書いたものをよりわかりやすくするために、言葉遣い、段落のつながりなど工夫をしないといけないですね。文学・文化のような文系学部がない世界を想像できません。(陳 秀茵 (チン シュウイン) /国文学 卒論：日本語文法)

大きく変わりつつある社会において、歴史や過去の文献をさかのぼることにより、今後社会が間違った方向に進んでしまうことを防ぐのが“人文学”であったと思う。自分の背中を押してくれ、大きな意義のある4年間だった。(久保 淳平/国文学 卒論：源氏物語に関する考察)

歴史学を専攻することで、社会の在り方、人間の生き方について深く考えることができたと思います。人間が人間について考えることは、なくてはならない営みだと思います。(前田 智恩/日本史学 卒論：大正期の朝鮮総督府官制改正について)

社会にあふれる事象の表層だけにとらわれず、そのもとにあること・ものへ目を向けること、並びに目を向けようとしていけるようになったと考えている。また人間が物事をどう捉え、行動してきたのか（するのか）を知り、考えることにより、自分の生きる世界を多様に考えることができるようになった。(山口 沙織/西洋史学 卒論：19世紀オーストリアにおけるカトリック教会と初等教育)

東洋史学専修でイスラム史を中心に学びましたが、今の世界について考える上で、大変意義があったと思います。(坂本 佳子/東洋史学 卒論：18世紀-19世紀前半のオスマン朝の遣欧使節)

自分にとって当たり前に見える「言葉」に対する意識が変わり、当たり前でなく、なぜそうなるのかということを考えるようになりました。(伊 寛子 (ゆん ひろこ) /言語学 卒論：語彙習得)

文学だけが文学部ではないので、理系的な論理的思考やコンピュータ操作を学ぶことができた。(和田 朋乃佳/心理 卒論：視野測定法の構築)

自身の専門の社会学はともかく、芸術系（文学・美術）や哲学などこそ、大学で学ぶ価値が高いと思う。入学時、専門を決めるのではなく、他専修の授業を受けられたことで、視野が広がった。とてもありがたい。(瀧井 建仁/社会学 卒論：セクシュアリティ)

自分の持っていた世界観を広げ、様々な考え方に触れることができた。普段の実生活に役立つというよりは、長い目で見た人生に彩りや豊かさを備えることができたと思う。(西道 茉莉絵/芸術学 卒論：「コッペリア」における「人形振り」)

専修での専門的な内容を学ぶだけでなく、レポートやゼミ発表、卒業論文などに取り組むなかで、資料収集や情報整理能力などを身につけることができました。特に学問の内容的にわからないことがほとんどだったので、自分で考察する良い訓練になったと思います。(楨平 大輝/美術史 卒論：ウィリアム・ホーガス「放蕩一代記」の研究)

人生を大きな視野でとらえる視点。世界へ目を向けるための知識と教養。(山口 裕也/英米文学 卒論：The Things They Carriedにおけるナラティブとトラウマ)

視野を広げて、様々な知識を教えていただきました。そして日本や他の国の留学生との接触を通して、性格などの面も成長してきました。(張 偉霞 (チョウ イカ) /社会動態 卒論：在日中国人のアイデンティティ)

コミュニケーション能力が向上しました。各国の留学生と神戸大学で出会い、違う価値観の人と交流ができ、とても勉強になりました。先生方からご指導をいただき、学問と生活上の問題、困ったこともお世話をしていただきました。(柯 佳 (カ カ) /文化構造 卒論：反事実条件文を中心に)

物事を多角的に、また批判的に見る必要があるという意識を持つことができた点において、意義があったと感じています。人文学が社会に対して何を言うことができるかも、4年間考えてきたつもりですが、それについてはまだ答えが出ていないので宿題にします。(川上 万葉/地理学 卒論：郊外空間の形成と遊興空間創出の関係)

文窓会主催 平成27年度 卒業生歓送パーティー (3月25日)



神戸オックスフォード日本学プログラム第4期生修了式 (7月27日)



同窓会・同期会・プチ女子会・プチ男子会…etc.

集まったよ!という楽しいレポート&フォト、募集中!
久しぶりに旧友と再会して

*39回生(平成3・1991年卒業)同期会 (2015年9月12日(土))

昨年9月に、卒業以来、初めての大規模な文学部同期生の同窓会に参加しました。同窓生が幹事として数名音頭を取ってくださり、お世話をしていただきました。会場は学生時代によく利用した食堂 LANS BOXの2階で、全国各地から30名以上の方が参加されました。

卒業以来、久しぶりにじっくりと学部を訪れて、LANS BOXも懐かしく感じました。同窓会が始まる前に、ミニ学部ツアーがあり、早く到着した数名が学舎内やその周辺を見て回りましたが、ずいぶんと雰囲気も変わってしまっていて、良い意味で学舎も近代的になっていました。昔は幽霊屋敷のような校舎に慣れていたので、びっくりしました。

同窓会が始まって、懐かしい面々が揃い、久しぶりに会ったのにも関わらず、昔に戻ったような気分で、すぐに思い出話に花が咲きました。大学時代の頃の両親のような年齢になってしまいましたが、忘れていた昔のことがいろいろ思い出されて、本当に楽しい時を過ごしました。皆さんの元気な顔を見て、近況も聞かせていただいて、久しぶりのLANS BOXで食事やお酒を楽しみました。終わってから見た夜景も最高でした。

このような機会を設けていただいて、幹事の方々には本当に感謝しています。疎遠になった友達とまたご縁ができてありがたいです。それ以降も、連絡を取り合っ、何人か会っています。特に、女性陣は「女子会」と称しては、機会を作って集まっています。人とのつながりって大切になりたいなあとしみじみと感じました。また、今後もこのご縁を大切にしていきたいと思っています。

*2~3人の集まりでもりっばなプチ同窓会。一緒に写真を撮って簡単なコメント・日時・場所を添えて、下記宛て、送ってください。
宛先 メール:kobeuniv.sakamoto@gmail.com または郵送:表紙題字ヨコの文窓会事務局まで。



*文窓会注:写真は、個人が特定できない形で掲載することを条件に、文窓会がお願いして幹事さんからご提供いただきました。

前坪 祐子 (西洋比較文学専攻)

神戸大学東京文窓会 木曜会講座 講師の増記隆介先生にインタビュー
「仏画の魅力とその見方、楽しみ方 Part2」に込めた思い



普賢菩薩絵像(国宝/東京国立博物館)

昨年に続いて、今年も神戸大学東京六甲クラブで仏画について話す機会をいただきました。私は美術史学専修の日本東洋美術史を担当しています。中でも平安時代の仏画は、私の卒業論文のテーマでもあり、作品の背景や技法を、日本国内だけを見るのではなく、同時代の中国・アジアと比較しながら、広い視野でとらえるところに意義と面白さがあります。

また、美術館の学芸員、文化庁文化財調査官という、文化財を扱う「現場」での仕事に長く従事してきたので、作品が制作される過程を緻密に調べ、復元的に考察することも研究の基本としています。

たとえば、この国宝「普賢菩薩絵像」は、平安時代後期の12世紀に描かれた和様の仏画です。背景には、その少し前に唐が滅亡、その後現在の杭州を中心に浙江省と江蘇省の一部を支配した呉越国が、弾圧された仏教の復興を願い、日本と高麗に戦乱で消滅した天台宗のお経の有無を問い合わせ、あれば写経して送って欲しい旨を依頼。これを機に、日本でも藤原氏が比叡山延暦寺を中心に仏教を守り立てていったという流れがあります。普賢菩薩は、その法華経を唱えて修行する者を守る仏様なのです。

仏様に捧げる仏画は、その時代の最高の技術を駆使して描き仕上げられています。たとえば、この普賢菩薩や象の透きとおるような白さは、絹の布に表と裏の両面から染色することから生まれたもの。日本で描かれたものですが、今では材料は解明されても、技法としての再現はできません。金箔を細く切って貼る截金(きりかね)も多用されています。また、細部に中国の技法も用いられていることから、遣唐使の廃止後も、中国から日本人の感性に合うものが選択的に取り入れられてきたことがわかります。

これだけ自然災害の多い日本で、これらの仏画が1000年近くも歳月を超えて原型をとどめている。これは奇跡と言っても過言ではないでしょう。それを可能にしたのは、その価値を理解し、守ろう、繋ごうとした人々の意思があったからです。我々研究者はしっかりとその価値を、今できるだけ多くの方に、そして次代に伝えていく使命を担っています。

「価値」がわからなくなると、モノ自体が消滅するのはたやすいこと。その「価値」とは、言葉と作品そのものを通じてのみ、後世に伝え遺せるものなのです。

神戸大学のOB・OGの皆さんへの講演も、そんな価値を知っていただきたい、周囲へ伝えていただきたいという思いを込めてお話ししています(談)。



増記 隆介 准教授
神戸大学大学院人文学研究科
(文学部 美術史学研究室)
1974年生。1999年東京大学大学院人文社会系研究科修了、財団法人大和文華館学芸部、文化庁美術学芸課文化財調査官を経て、2013年から神戸大学大学院人文学研究科准教授。

平成28年文学部担当の木曜会講演
「仏画の魅力とその見方、楽しみ方 Part 2」を開催しました。(東京支部)

講師 増記隆介氏 神戸大学大学院人文学研究科 日本東洋美術史 准教授

- 開催日時:平成28年4月28日(木) 18:00~19:20
- 開催場所:神戸大学東京六甲クラブ 会議室
- 参加者数:37名(男性27名、女性10名)
- 文窓会からの参加者:(敬称略順不同):竹歳一夫(32年卒)、高見秀史(33年卒)、橋本静子(36年卒)、白藤禮幸(36年卒)、五味尚子(37年卒)、日下部俊子(37年卒)、田中 勉(47年卒)、中野 裕(36年卒)*本部から武藤美也子(43年卒)、廣野幸夫(43年卒)

参加者の声

「お話は幾分専門的で、詳細、多岐に亘った観があったが、より詳しく仏画を見て楽しむ上で大切な絵画技法等の着眼点を聞いたことはとてもよかった。」
「普段、仏画のお話を聞く機会が余りないので、新鮮な気持ちで興味を持って聞くことができ、仏画に一層の興味を覚え、仏画を見る参考になった。特に、細かい絵画技法や彩色に時代の特徴があることに興味を持った。」
「全体的に真面目で内容的にも充実したレベルの高いお話であったが、前回の様に、少し脱線して、関連した面白い話があれば、更によかったと感じた。」
「中国絵画や他国の文物の影響を受けながら日本独自の仏画が完成されていくプロセスのお話に興味を持ってよかった」等々の感想をいただきました。

東京支部便り

I. 文窓会<東京支部総会>を開催(4月28日)

開催場所 東京六甲クラブ

開催日時 2016年4月28日(木) 14:00~16:45

参加者 12名

(敬称略順不同) 竹歳一夫(S32年卒)、高見秀史(S33年卒)、河野房子(S35年卒)、小宅信吾(S35年卒)、橋本静子(S36年卒)、白藤禮幸(S36年卒)、中野裕(S36年卒)、五味尚子(S37年卒)、日下部俊子(S37年卒)、田中勉(S47年卒)

ゲスト:文窓会本部から武藤美也子(S43年卒・本部長)、廣野幸夫(S43年卒・本部幹事長)

議 題

①東京六甲クラブの現状報告

特に東京六甲クラブの新規会員募集に注力していること。文窓会の会員は23年度30名、24年度25名、25年度23名、26年度27名、27年度24名となっており、少なくとも23年度の30名を超えたい。

文窓会の会員総数の目標は80名にすること、これを目指しているため、皆様の協力をお願いします。

ご参考までに、27年度の文窓会の六甲クラブ会員24名は下記のとおりです。

(順不同敬称略)竹歳一夫、廣瀬祝子、渡瀬道子、河野房子、白藤禮幸、橋本静子、中野 裕、五味尚子、川島好子、浜島代志子、野田弘三、青木博子、錦織洋子、丹羽千穂、松澤昭史、田辺久美子、稲葉昭典、岡 真知子、田中 勉、村上 好、池澤雅弘、長野純一、中西俊樹、松下直子。

②今後の文窓会東京支部の運営について

次回も文窓会の総会は、文窓会担当の木曜日の日に同時開催とすることとした。

③参加者の現況報告

④ゲスト

参加された本部の武藤美也子会長、廣野幸夫幹事長より、文窓会本部の現況が詳細にわかり説明あり。OBとの親睦と同時に、現役との親睦および現役の活動の補助など、新入生の歓迎会、教授陣との顔合わせ、ホームカミングデイのアレンジ、卒業式でのお別れ会など、ことあるごとに現役へのバックアップを心掛けて活動している旨の力強い説明あり。会長より説明のあった大学側の文学部の入学人数削減(文学部の入学定員を、115人から100人に削減)については驚愕の極みであった。

⑤文窓会の人事異動

1) 長年副会長を務められた五味尚子様(S37年卒)から岡 真知子様(S47年卒)に交代することになりました。

結果として、今後は 会長・中野 裕(S36年卒)、副会長・田中勉(S47年卒) 副会長・岡 真知子(S47年卒)の陣容にて、年に数回開かれる代議員総会、及び理事会に参加して、東京六甲クラブの運営に参画し、他の部(現在11部あり)との行事の打ち合わせ、調整などを行います。

2) 元副会長で、長年文窓会東京へのご支援をいただきました松澤昭史様(S40年卒)が本年2月ご逝去されました。謹んでお知らせ致します。

⑥東京六甲クラブ設立50周年下記記念会への参加をお願いします。

「日野原重明祝祭管弦楽団コンサート」

10月29日(土) 13:30 開場 14:00 開演 於/東京六甲クラブ

野上前大学評価・学位授与機構長、元学長・講演会「岐路に立つ大学運営と課題(仮)」

11月24日(木) 18:00~ 於/東京六甲クラブ

*今年50周年を迎えた東京六甲クラブの事務局より

「神戸大学の同窓生が学部や世代を越えて集う東京の憩いの場<神戸大学東京六甲クラブ>は、今年50周年を迎えます。1966年設立の東京凌霜クラブを母体に、2011年、神戸大学全学部卒業生の交流の場として<神戸大学東京六甲クラブ>と改称し再スタートを切りました。本年は50周年行事として「クラブ50周年記念祝賀会」を開催します。」との案内がありましたが、惜しくも「文窓」誌発行のタイミングと合わず、本誌が会員の皆様のお手元に届く頃の開催となりました。そこで、期日が間に合う上記⑥の2つのイベントをご紹介します。

文窓会東京支部へのお問い合わせは下記へ

事務局:〒223-0064 横浜市港北区下田町1-1-113 中野 裕

TEL & FAX: 045-561-6317 / E-Mail: y.nakano.1938-panda@d9.dion.ne.jp

文窓会(文学部同窓会) — 会計報告 —

平成27年度収支計算書
(平成27年4月1日~平成28年3月31日)

平成27年度財産目録
(平成28年3月31日現在)

【収入の部】

前年度繰越金	¥22,545,714
今年度収入合計	¥4,845,597
会費納入金	(3,900,000)
協力金	(623,000)
受取利息	(265,597)
行事受取会費	(57,000)
収入合計	¥27,391,311

【支出の部】

事業活動費	¥2,486,683
会報費	(1,334,057)
歓送迎会費用	(501,600)
総会費	(325,000)
文窓賞費	(235,226)
ホームページ管理費	(64,800)
人件費	(26,000)
協力金費	¥880,000
学友会費	(110,000)
学術助成費	(650,000)
活動援助費	(100,000)
学祭援助費	(20,000)
事務局費	¥882,452
事務業務委託報酬	(600,000)
家賃・光熱費	(123,840)
通信費	(65,734)
消耗什器備品	(26,500)
消耗品費	(66,378)
支払手数料	¥32,120
郵便振替料金	(29,860)
振込手数料	(2,260)
旅費交通費	¥64,160
会議費	¥133,186
交際接待費	¥117,777
租税公課	¥53,906
慶弔費	¥3,235
今年度支出合計	¥4,653,519
次年度繰越金	¥22,737,792
支出合計	¥27,391,311

I. 資産の部	¥22,737,792
現金	(88,869)
(池田泉州銀行) 普通預金	(111)
(みなと銀行) 普通預金	(3,054)
(ゆうちょ銀行) 普通貯金	(1,311,963)
(ゆうちょ銀行) 振替口座	(2,337,150)
(みなと銀行) 定期預金	(8,061,500)
(みなと銀行) 定期預金	(1,006,589)
(みなと銀行) 定期預金	(1,509,436)
(ゆうちょ銀行) 定期貯金	(8,419,120)
II. 負債の部	¥0
III. 正味財産合計	¥22,737,792

事業年度に係る決算報告書を監査した結果、適正であることを認めます。

平成28年6月22日

会計監査 花木直彦 印

会計監査 河島 真 印

神戸大学学友会のご案内

神戸大学学友会は各学部同窓会の相互交流と大学の発展に寄与するため、同窓会の連合体として組織され、各学部同窓会から選出された人々による幹事会で運営されています。具体的な活動としては、幹事会や大学役員との懇談会のほか、大学広報紙「風」編集委員会、神戸大学クラブ(KUC)運営委員会、データベース委員会などです。

神戸大学学友会を構成している同窓会:事務局は(神戸大学企画部社会連携課)

- 文窓会(文学部) ●紫陽会(教育学部・発達科学部) ●社団法人 凌霜会(経済学部・経営学部・法学部・国際協力研究科)
- くさの会(理学部) ●社団法人 神緑会(医学部医学科) ●就進会(医学部保健学科)
- 社団法人 神戸大学工学振興会 KTC(工学部) ●六條会(農学部) ●翔鶴会(国際文化学部) ●海神会(海事科学部)

「神戸大学クラブ」(K・U・C)に入会しませんか

神戸大学卒業生が学部の壁を越えて、交流をはかり親睦を深める集いです。(神戸、大阪、東京でそれぞれが活動を展開)

ご入会ご希望の方は TEL 078-851-3433 までご連絡ください。(K・U・C 運営委員 日高 健一)

文窓会ホームページをご利用ください!

卒業生や大学関係者のみなさんの交流の場です。いろいろな形で利用が可能ですので利用を希望される方は下記メールアドレスまでご連絡をお願いいたします。kobeuniv.sakamoto@gmail.com(担当:坂本/文窓 Web 担当、社会学32 回生)

文窓会役員(平成28年9月末現在)

会長 武藤美也子(43年卒・国文学)

<その他の役員>

日高 健一(36年卒・芸術学) 花木 直彦(36年卒・国史学) 三宅 征彦(41年卒・社会学) 田中 賢司(42年卒・社会学) 廣野 幸夫(43年卒・社会学)
吉田 浩次(43年卒・社会学) 西川 京子(44年卒・西洋史学) 田中 睦子(46年卒・芸術学) 坂本 直樹(59年卒・社会学) 田中 康二(63年卒・国文学)
河島 真(H33年卒・国史学)

表紙の題字は、文学部国文学教授 福長 進先生にご依頼しました。

http://www.kobe-u.biz/bunsokai/ (検索→文窓会)